

大阪市立平野図書館 口にだせない好きな本 リスト

死刑基準

加茂 隆康/著

幻冬舎

我々は何を根拠に命を裁けばいいのか？

死刑廃止論者の弁護士が（妻が強姦され殺害される）関わった事件で、加害者への憎しみのため、死刑を求める心理変化…読み終わって、すごく苦しくつらく、ずいぶん深く深く考えさせられました。読者の皆さんはどのように感じられたか、話し合いたいです。

(P.N. 花)

後味が悪すぎる 49 本の映画

宮岡 太郎/著

彩図社

とにかくトラウマ級、後味が悪い、胸クソが悪い映画の紹介本。

TV 放送も無理、心の準備が必要な映画ばかり。精神崩壊注意。読むのも、観るのも自己責任。絶望感に心折れる。火垂るの墓、セブンものっています。

(P.N. ゆきんぼう / とにかく無類の図書館と映画好き。1970 年代の映画が一番良い)

百日紅

杉浦 日向子/著

実業之日本社など

北斎とその娘お栄を中心に、様々なテーマで描かれた短編？からなるマンガ作品。

もちろん創作なので、お栄さんがこんな人だったかはわからないけれど、
こんな女だったらサ、オマエべらぼうに面白いじゃねえか、ねえ、と毎回思わ
されて読み終わりには口調が江戸っ子になりがち（関西生まれ、関西そだち）。テーマにはそぐ
わないが、絵柄の好き嫌いなのか？あまりすすめても手応えがなく、いつしか人にすすめなくな
ってました。笑って泣いて、ポカンとしたり
ゾワゾワしたりして、このままずっと続いていくような読み終わりの余韻。
(P.N. 匿名 / 今年は大河が蔦屋重三郎なので、入口が増えるといいなあ。)

薄情

絲山 秋子/著

新潮社など

いわゆる「地方」の閉そく感とか独特な人間関係とか、あまり肌で感じる機会がなく、どのく
らいこの小説を理解できているのかわからず。とはいえ、今いる場所に関わらず、大なり小なり
こういうことの繰り返しなのかね…でも（だから？）人と人とのつながりって大事な気がする
（ここが上手く言えなくて陳腐になる！）と思わせてくれる。

わかりやすく適度な湿り気や格好つけたような冷たさはなくて、淡々としながらもそこに優し
くふれる手つき（特にファンタジー）を感じる大好きな小説家。

(P.N. 匿名 / 「ばかもの」「海の仙人」もおすすめてです。)

謎の毒親

姫野 カオルコ/著

新潮社

「毒親」という言葉、かなり一般的になってきてタイトルだけだとあまり惹かれないかも。

この小説は、子の視点で「あの時のあの親の行動って一体…（わけがわからない）」という出来事を大人になって振り返ってしたためたお便りをもとに進むスタイルで、親との関係が良好な人には何を伝えたいのか全く理解できないのじゃないかと思う。重い内容を想像するかもしれないが、程よくコメディタッチで笑いながらすすすす読めるのでご安心を。でも私は面白く読んだ後はいつも笑いながら泣いてしまう。思い出し悲しい涙が2割。全体の優しい仕立てや前向きなメッセージに励まされて流れる涙が8割。この気持ちをうまく伝えられなくて笑

(P.N. 匿名 / 「姫野カオルコさん全ての作品が素晴らしいです！)

熊嵐

吉村 昭/著

新潮社

口に出せないというよりも薦めるのをためらうというか、人を選ぶというか。大正4年に北海道で実際に起きた獣害。巨大な熊の猛威に見舞われる村落と、それを仕留めるために現地へやってきた漁師を描く作品。ドキュメンタリー小説として創作も多分にあると思う割れるが、熊の圧倒的な力、そこからもたらされる目を覆う惨状とどうしようもない恐怖が、小説だからこその闇の中の気配、様々な物音、匂いといった道具立てて描かれ、緊迫感、臨場感がいやまず…令和の今も日々のニュースでクマ出没を見るにつけ、この恐怖は今も全く変わらないと思う。

(P.N. 匿名 / 吉村昭さんの小説には、他にも「熊撃ち」があるので、マタギに興味がある方にはオススメです。)

朗読者

ベルハルト・シュリンク/著

新潮社

15歳のミハエルが初めて知った女 21歳年上のハンナ。

自信のなかった僕は肉体的にも精神的にも惹かれ、同世代の男より女慣れした男になってゆく。

彼女はいろんな本の朗読を聞くのが好き。あらゆる文学作品を彼女のために読み聞かせる。

ある日、突然彼女はいなくなる。彼女はヒトラー時代の看守としての罪で裁判へ。僕は法科の学生として現場に。僕は、彼女は文盲のため無罪だと考えるが、彼女は文盲を認めたくなく牢屋へ。彼は牢屋へ朗読のテープを送り続ける。そして…

切ない恋物語が2部で残酷なヒトラー時代の現実へ。衝撃的転回と悲しい結末。

本は21か国でヒットし、「愛を読む人」のタイトルで映画にもなった。

(P.N. 庭田まどか / 古代史と連歌・連句にとっぷりの人)

ほかに誰がいる

朝倉 かすみ/著

幻冬舎

高校生の女の子が同じ学校的女子生徒を好きになって、その身をもほろぼしてしまう話です。

当時私は中学生で、女の子の友人に恋のような感情を抱いていたのですが、その時は今ほどLGBTQとか、そういう話もなかったもので、誰にも言えずにいました。この本を読んで、本の中の女の子（主人公）が私の友人であるかのように思っていました。

(P.N. あさの / 女性。アルバイト。寂しくなる話が好き。)

ブツダとシツタカブツタ

小泉 吉宏/著

KADOKAWAなど

20年以上も前に出会った本です。心が軽くなる本だと思います。尽きない悩みに自分の心が壊れるかと思っていた頃、この本に出会いました。生きることに不器用で人との関わりに不安になり、心がどんどん疲弊していく日々でした。この本は、私の心を解きほぐしてくれて「ものの見方」や「考え方」を教えてくださいました。「そのまんまでいい」なんて心に響くフレーズ。一昨年、新シリーズが出版され、思わず手に取りました。

(P.N. とろりん / 本が大好きな老女です)

検屍官シリーズ

パトリシア・コーンウェル/著

講談社

ずいぶん前に読んでいたので調べたら 1992 年 1 月発行となっていたので、末っ子が 1 歳の時だったのかと、改めて懐かしく思いました。検屍するので読んでてグロいですが。

図書館で借りて、一年に一冊のペースで読んでいたような気がします。

その後、日本の作家さんもミステリー物が面白いものがでてきて、移行して何冊まで読んでいたのか忘れてしまいましたが、主人公のケイや姪のルーシー。日本より早い SDGs、国籍、パワハラなどが新鮮でした。19 まで読んでいました。現在 20 まで刊行されています。

(P.N. ケイちゃん / パート勤務)

じつは、わたくしこういうものです クラフト・エヴィング商会/著 文藝春秋など

驚きの結末とかどんでん返しなど、人に話したくなるような内容ではないのですが、ただ好きな本です。架空の職業の方がモノクロ写真と共に紹介され、その人たちが自分の仕事について語るという内容です。本当にあったらいいなあと思う職業は、冬眠図書館の司書。利用する人たちは夏の間たくさん働いて、冬になったら冬ごもりするように冬眠図書館で本を読むのだとか…そばにはブランケットとシチューとコーヒーと
コッペパンまで用意されているそうです。いいなあ
(P.N. 近頃 本を読めなくなってきたひと)

ひとめあなたに 新井 素子/著 東京創元社など

地球があと数日でなくなる時に別れた恋人に会いに行くというお話です。
恋愛小説とも言えなくはないが、道中に会う人の正気と狂気に少し息苦しい話だなと思いつつながら読んだ記憶があります。
残酷なシーンもあるのであまり人にすすめられる本ではないのですが、様々な女性の行動に「こんな時自分だったらどうするんだろう」とか「こんなふうに人を愛せるだろうか」と考えさせられた一冊です。
(P.N. 最近本が読めてないなあ 画面で読むより本がいい。目と手と肩がもたないと感じる年頃です。)

異形コレクション I ラブ・フリーク

井上 雅彦/監修

廣濟堂出版

ホラーの短編アンソロジーです。巻ごとのテーマに沿った全話書下ろしという贅沢さ。サスペンス、ゴシック、モンスター、ファンタジー、SF、時代物 etc… 様々なジャンルで作家ごとの個性が光る。まさにホラーの宝石箱です。初期のものは小説ごとの扉絵までもが描きおろしです。現在 58 巻までありますので、気になったタイトルから読むのがおすすめです。私はグランドホテルが好きです。

(初期のものは絶版になっているので、図書館においていただいて大変ありがたいです。その後、自分で全館そろえました)

(P.N. 箱犬 / 学校の図書室にあった、学校の怖い話から角川ホラー文庫に移行した系です。)

TUGUMI -つぐみ-

吉本 ばなな/著

中央公論新社

病弱な美少女、海辺の町、よそから来た青年との恋愛。こんな少女マンガのような要素がたっぷりつめこまれた小説を今でもとても大切に読みかえすなんて、この年になると誰にも言えませんが…

(P.N. 2 児の母)

殺戮にいたる病

我孫子 武丸/著

講談社

東京で起こる若い女性を狙った連続猟奇殺人事件を描いたこの作品。

犯人視点のシーンでは、犯人の行動を追体験するような感覚の

恐ろしさがあります。途中、かなりショッキングな描写がありますが、それを乗り越えて最後まで読むと驚愕の真相が待ち受けています。

ミステリの面白さがわかる素晴らしい作品なので、ぜひ多くの人に読んでほしいです。

(P.N. 元羊飼い / 古典作品から現代作品まであらゆるミステリを愛するミステリマニアです。)

KAGEROU

齋藤 智裕/著

ポプラ社

俳優が素性を隠して応募して賞をとった本だった、と思い

数年前に手に取って読んだ本です。自分の臓器をお金に

換えるという、とんでもないのですが、その過程にクスッと笑うところがあって、題材に対して

あまり重い感じはなく、スイスイと一気に読めました。TheLastChapter を読んで「あれ？ そうな
ったの？」と戸惑い、Report を読んで「これはどっちだ？」とモヤモヤします。

(P.N. うさぎ / 市内在住、成人済)

大阪市立平野図書館 06-6793-0881

このリストはクリエイティブ・コモンズ CC-BY4.0 にて公開します。

これはクレジット表記をすれば、誰もが自由に利用・共有できるライセンスです。

クレジット表記は「大阪市立平野図書館 口にだせない好きな本」とします。